都道府県別賞一等

想いのバトン

東京都　安田学園中学校　一学年

梅村　美怜

それはある夏の日のことだった。

「朝だよ、早く起きなさい！」

毎日、我が家の朝は母の元気な声から始まる。せわしなく台所でフライパンを振る音、私を急かす音。それが母の日常であり、私にとって当たり前の景色だった。しかし、あの猛暑が続く夏の日の朝、その当たり前が突然、音もなく静かに崩れた。

目を覚ますと、家の中が妙に静まり返っていた。時計の針はいつも家を出る時間を指している。慌ててリビングへ行くと、そこには誰もいなかった。薄暗い母の寝室をそっと覗くと、いつもパワフルな母が、布団の中で小さくなって激しく息をあげていた。

「ごめんね、ちょっと目眩がして動けないの。」蚊の鳴くような弱々しい声だった。いつも我が家の中心で太陽のように笑っている母が、私の知らない小さなおばあさんのように見えて、私は急に足がすくむような恐ろしさを覚えた。

その日はなんとか学校へ行ったものの、授業内容は全く頭に入らなかった。もし、母がこのまま重い病気になって入院したらどうなるのだろう。我が家の生活や、私が毎日通う学校、これからの未来はどうなってしまうのか。最悪の事態が頭をよぎり、胸の奥が冷たい不安で満たされていった。

夜、静まり返った家の中で、私は昼間に母が病院で処方してもらった薬と、スポーツドリンクを持って再び母の部屋へ向かった。母は薬が効いたのか、小さな寝息を立てて眠っていた。ほっとして部屋から出ようとしたとき、机の上に一冊の古いファイルが開いたまま置かれているのが目に入った。月明かりが差し込む机の上で、私はそのファイルをそっとめくった。「生命保険証券」という、小学生の私には馴染みのない漢字が並んでいた。しかし、その中に私の名前を見つけた瞬間、指が止まった。そこにあったのは私が生まれた年から毎月、母が欠かさず払い続けてきた記録だった。決して安くはない金額が、十数年もの間、毎月規則正しく刻まれている。それは、母が健康なときも、仕事で疲れているときも、私の見えないところでずっと守り続けてくれた、果てしない時間の足跡だった。

「もし、私に万が一のことがあっても、この子だけは不自由なく生きていけるように」

書類の余白に、母の細い文字で小さくそう書き残されているのを見つけたとき、胸の奥から熱いものが一気に込み上げてきた。いつも自分の服を買うのを我慢して、私に新しい教科書や服を買い与えてくれた母の姿が、次々と浮かんできた。母の節約は、全部ここに繋がっていたのだ。

それまで私は、保険とはテレビのコマーシャルで見る「大人のビジネス」だと思いこんでいたのだ。しかし、それは大きな間違いだった。保険の本質は、お金そのものではない。自分が倒れた後も我が子を守りたいと願う、親の〝祈り〟と〝究極の愛情〟の形だったのだ。

翌朝、母はすっかり熱が下がり、「心配かけてごめんね」といつもの眩しい笑顔で朝食を作ってくれた。私は少し照れくさくて、ただ「おはよう」とだけ言って、いつもより美味しく感じる味噌汁を飲み干した。

世界にある保険の数だけ、誰かを必死で想う人の優しさが存在する。私はまだ親に守られている小さな存在だけれど、いつか大人になったとき、私も大切な人を守るために、この「目には見えない想いのバトン」を次の世代へ繋いでいける人間になりたい。